（平成30年度）

# 学校自己評価書

| 園番号 | 園名 |
|---|---|
| 712 | 鶴舞こども園 |



| 大項目 | 中項目 | 小項目 | 具体的評価項目及び指標 | 取組と成果 | 評価 | | 評価の観点・理由 | 課題及び改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ 教育活動に関するもの | （1）教育目標・教育計画 | ① 教育目標の設定 | 全職員で教育・保育目標について共通理解をする。<br>社会現状や本園の子どもの実態からめざす子ども像を明確にする。 | 「心豊か」「たくましく生きる」という姿を具現化し、3学年ごとの姿を系統的・連続的に示すことができた。 | B | A | 各学年別のめざす子どもの姿が理解しやすくなり、教育目標をより意識して保育・教育指導にあたることができた。 | 年度当初、保護者に教育目標や教育ビジョンについて園長から説明をしているが、具体的な発達の姿や取組みの実践・成果などの啓発については発信不足であるので、来年度は学期・学年毎に発信していきたい。 |
| | | ② 教育計画の作成 | 昨年度の「教育・保育計画」と「育ちや学びの履歴」を統合させて、3年保育を各学年5期に応じた教育・保育の計画を示す。 | こども園での「生活」「経験」「発達」の三つの連動性を配慮して教育計画の作成や教育課程の編成に全職員が参画した。 | A | | 前年度の総括を反映させた教育計画を作成し、職員間で共有できた。 | 期毎に教育課程のめざす子どもの姿やねらいから実践を振り返り、職員間で成果と課題を明らかにする。 |
| | | ③ 教育課程の編成 | | | | | | |
| | | ④ 教育活動の評価 | 実践記録として実際の子どもの様子とその評価を蓄積していく。 | 園環境の特性や地域の人材をカリキュラム・マネジメントに活かすことで教育活動の展開が広がった。 | A | | プロジェクト活動として、5歳児は豊かな経験ができ、保護者から高い評価が得られた。 | 3歳児・4歳児の教育活動については保護者・地域への啓発に努めていきたい。 |
| | （2）教育内容・保育指導 | ① 指導計画の立案 | 年齢や発達に応じて、児童期以降の知的発達や社会的発達を支える確かな経験を保障するための指導計画を立案し、保育内容を精選する。 | 毎月末の職員研修日において当日の成果と課題に基づいて翌月の指導計画を作成し、職員間で共有した。そのことによって発達の過程に沿った保育内容（子どもの経験）を精選することができた。 | B | A | 毎月の指導計画を振り返る際に「10の姿」の視点からどの姿が読み取れるのかを話し合う必要がある。 | 職員間で「10の姿」を通して子どもを見取るということや注意点などを意識して指導計画を立案する。 |
| | | ② 保育内容の精選 | | | | | | |
| | | ③ 指導方法の工夫改善 | 子どもが自ら環境にかかわり、主体的に遊びを創造するための指導方法を探る。 | 子どもの「いいもの見つけた」「いいこと考えた」という創造的なひらめきから遊びが展開するという仮説を立て実践事例を分析した。 | A | | 子どもが自ら考えた「いい」を実現する過程での経験や学びを明確にすることで援助や環境構成の重点が分かった。 | 「創造的なひらめきから遊びをかたちづくる」実践に次年度も取り組む中で、幼児教育において育みたい資質・能力を保障する指導方法を明確にする。 |
| | | ④ 評価 | 昨年度から今年度1学期までの実践と園内研修の記録を基に研究論文にまとめ、ソニー^幼児教育支援プログラムに応募し評価を得る。 | 応募するにあたり、実践の分析・記述・評価の方法を学ぶことができ、保育指導の向上につながった。 | A | | 「創造的なひらめきから遊びをかたちづくる『いい』こと考えた―きっと『いい』はず―『いい』とはこれだ」という主題で研究したことが認められた。 | 来年度は実践発表をすることで、更なる実践研究を深化させていきたい。 |
| | （3）園行事 | ① 指導計画の立案 | 計画・実施・評価・改善の体制づくりを明確にし、子どもの主体性が引き出せる内容を精選する。 | 園全体で取り組む活動や行事・季節や伝統文化にかかわるもの・家庭との連携にかかわるもの・毎月実施するものに分類し年間計画や指導計画に記述している。年間の見通しを持ち日常の保育内容に組み入れていく必要性がある。季節や伝統文化にかかわるものについては、家庭での経験が少なくなった実態があるので、園での経験から興味や関心を持つことができた。 | B | B | 運動会・音楽会・作品展など園全体で取り組む活動においては子どもの成長を見取ることができるが、取り組み方においては長いスパンで計画的・効率的に進めることが必要である。 | 行事への取組では成果だけでなく、子どもたちの意欲や取り組み方などの過程を保護者に伝えていきたい。行事が子ども主体に活動できる内容であり、子どもが達成感や自己肯定感を味わえるように指導を高める。 |
| | | ② 行事内容の精選 | | | | | | |
| | （4）人権教育 | ① 人権教育指導計画の立案 | 互いに違いを認め合い、育ち合える子どもを目指す中で、子どもの感性を育んだり、自分の思いを伝え相手の思いも大事にする体験を積んだりできる機会を見逃さない保育者の人権感覚を磨く。 | 保育者が子どものつぶやきや表情から一人一人の思いを探り、「一人一人を生かし、支え合うなかまづくり」をめざすことを常に意識することで人権教育の視点が多面的になったり、深まったりした。 | A | A | 奈良市人権教育研究大会で本園の取り組みについて発表したことで、あらゆる視点から子どもの姿を捉え人権教育につなげていく取り組みが評価された。 | これからも教職員の人権感覚を高め、子ども一人一人にとって安心・安全な居場所となる園のあり方を工夫改善していく。 |
| | | ② 保育内容の精選 | | | | | | |
| | | ③ 指導方法の工夫改善 | | | | | | |
| | （5）生徒指導 | ① 組織的な指導 | | | | | | |
| | | ② 教育相談・幼児理解 | | | | | | |
| | | ③ 家庭との連携 | | | | | | |
| | | ④ 関係諸機関との連携 | | | | | | |
| | | ⑤ いじめ・児童虐待問題について | ・対処方針や指導計画が明確である<br>・日頃より実態把握・早期発見に努めている<br>・各学級の状況を園組織として共有できている<br>・保護者や地域と連携できている<br>・組織的に迅速に対応する体制が整備されている | 奈良市いじめ対策アクションプランを基に対処方法を共有理解し、学級経営や指導計画に取り入れる。園庭開放時は保護者の管理の下で子どもをしっかり見てほしいと啓発しているが、園側も日々子どもの様子について多角的に見取ることでいじめにつながる言動を指導することができた。教職員のいじめを見抜く感性を磨くことが大切である。 | A | A | いじめにつながる言動や友達関係を見抜く感性を鋭敏にし、個別に指導したりクラスで話し合いを持ったりしてきた。長時間保育では異年齢保育の中で子どもの姿を見抜き、担任との連携を密にし園全体で改善に向かえるように取り組む。 | クラスの課題や問題を職員間で共有できるように、複数の目で子ども同士の関係性や内面の把握に努める。また、保護者に子どもの様子をこまめに伝え課題を明確にして具体的な対策を示し、迅速に実践する。 |
| | （6）特別支援教育 | ① 推進体制 | 全職員が個別の実態把握と支援の方法を共有できるようにする。特別支援コーディネーターでの情報を共有し個別の指導計画・支援計画を立案する。関係機関との連携を密にし、保護者の思いにも寄り添う。 | 年度初めに園児理解の園内研修を実施し、園児の実態把握とこれからの特別支援のあり方を探った。保護者との連携を密に保護者の思いを受け止めながら関係機関に相談されるよう啓発する。保育観察を受けることで支援の方法が明らかになった。保護者に個別の指導計画を示すことで家庭での協力が得られ、信頼関係が深まった。 | A | A | 保護者との信頼関係を構築することで、早期に発達相談を受ける子どもが増えた。そのことから保護者も安定し子どもの変容につながった。<br>就学に向けての支援計画や在園児の指導計画などを作成し目標に向かって取り組めた。 | 個別の指導計画の書き方や支援の方法やスキルを特別支援教育コーディネーター・関係機関から学ぶことで子ども理解を深めることができた。来年度は支援を要する子どもが増えることもあり、推進体制を構築したい。 |
| | | ② 個々に応じた特別支援教育の内容 | | | | | | |
| | | ③ 指導方法の工夫改善 | | | | | | |
| | | ④ 家庭との連携 | | | | | | |
| | | ⑤ 関係機関との連携 | | | | | | |

（平成30年度）

# 学校自己評価書

| 園番号 | 園名 |
|---|---|
| 712 | 鶴舞こども園 |

| 大項目 | 中項目 | 小項目 | 具体的評価項目及び指標 | 取組と成果 | 評価 | | 評価の観点・理由 | 課題及び改善方策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅱ 園経営に関するもの | （1）組織運営 | ① 園長のリーダーシップ<br>② 園経営目標・方針 | 教育方針や園経営について考えを明らかにし、リーダーシップを発揮する。 | 教育ビジョンを作成し、具体的な取組を職員や保護者に説明した。質の高い教育・保育を目指して指導やアドバイスを行った。実践研究を応募し最優秀に選ばれたことで本園の教育・保育理念が理解された。 | A | A | 保護者や地域の方から応募論文を読んで教育方針がよく分かったという意見をいただいた。 | 研究を今後も続け、タイムリーに発信したり公開したりすることで本園の取り組みを多くの人に理解してもらう。 |
| | | ③ 職員の適正配置と運営への参加意識<br>④ 校務分掌等の連携 | 職員の能力・適性を把握した上で、担任の配置や研修担当や業務の分担を決める。少し高めの目標を示し挑戦させる。 | 現状に満足することなく、保育の質を高めるための自主的な取り組みを引き出す。 | B | | 昨年度からの担任が1名しかいないということもあるが、積極的に意見を交わす姿には至らなかった。 | 職員全員で園運営にかかわっているという意識を高めるとともに、クラス運営が円滑に運ぶための体制を整える。 |
| | | ⑤ 会議の運営と位置づけ<br>⑥ 会議の結果 | 会議日を位置づけることで、見通しを持って保育や業務に専念できる。会議に出席できない預かり保育担当者への伝達・連携を図る。 | 毎週水曜日を会議日と位置づけ、議案を事前に副園長が伝え、担当者が素案を提案する。議事録を綿密に記述し、欠席者に記録者が記録と口頭で伝える。 | A | | 会議の結果が共有でき、運営がスムーズになった。 | 園活動や業務などがマンネリ化しないように反省・評価も記して、それを基に会議に挙げ検討する。 |
| | | ⑦ 職場の人間関係<br>⑧ 園評価の実施 | 職場の人間関係を図る。園評価を実施し職員のモチベーションを上げる。 | 園長・副園長に気軽に相談できる雰囲気を大切にするとともに、フォロアシップに努める。初めての担任であったが、保護者対応の上達が見られた。 | A | | 職員から本園の職員関係が良いので、働きやすいという意見を複数聞かれた。 | 園評価の項目を職員で話し合ったり評価に基づいて新たな対策を皆で検討したりしてチームワークづくりを図る。 |
| | （2）研究・研修 | ① 資質の向上をめざした組織的・計画的な園内研修の実施<br>② 保育改善を目指した保育研究・実践の実施 | 研究主題・人権教育・特別支援教育・安全管理等において研究計画を立案し、系統的組織的に実施する。各担任は期毎に事例を持ち寄り、職員間で読み取りをし、改訂版を作成する。実施をまとめ、論文を応募する。 | 担当別に計画を立て、研修組織を確立した。公開保育を実施したり、研究論文を応募したりした。またカンファレンスが日常化になるような雰囲気をつくった。 | A | A | 分析・記述することで、指導のあり方や子どもの発達の過程が共通理解することができた。担任が2名替わったことから昨年度からの引き継ぎが不十分な面があった。 | 担当別に学習計画を立て、進めていくことにしていたが、職員全員での研修がなかなか持てなかった。研修時間をもっと確保できるように仕事の効率化を図る。 |
| | | ③ 園外の研修への積極的参加<br>④ 園外研修内容の報告や伝達 | 県・市の研修講座やこども園会の研修部会に進んで参加する。 | 県・市の研修講座をはじめ、奈良女子大学附属幼の公開保育や全幼研奈良大会にも全員自主参加するなど皆で高まろうとする雰囲気があった。 | A | | 参加したものが朝礼や水曜の会議で資料を基に報告をし、回覧する。 | 次年度の実践発表（6月1日）に向けて、更なる実践研究に努める。 |
| | | ⑤ 研修成果の普及 | | | | | | |
| | （3）安全管理 | ① 安全計画の立案<br>② 防災計画の立案<br>③ 危機管理体制の整備<br>④ 安全指導の工夫改善<br>⑤ 家庭との連携<br>⑥ 関係機関との連携 | 安全計画・防災計画を全員で見直す。遊具の安全管理は月末に必ず実施するとともに、随時園長・副園長に報告する。危機管理体制においては危機管理マニュアルを理解し、危険・事故を未然に防ぐ意識を高める。 | 地震発生時のマニュアルを作成し家庭に配布するとともに園児引き渡しカードの内容を見直した。 | B | B | 避難訓練は計画通り実施することができた。実際に震度4の地震が発生したことで、具現化することにつながった。 | 常に危機管理意識を持ち、今後の子どもたちの安全保育に努める。 |
| | （4）保健管理 | ① 保健計画の立案<br>② 心のケアや健康相談の体制の整備 | | | | | | |
| | | ③ 健康観察、健康管理能力の育成<br>④ 関係機関との連携<br>⑤ 昼食の衛生管理 | 預かり保育担当者と担任との連携を密にし、一人一人の健康状態の把握に努める。集団感染予防に努める。職員間・家庭においても保健管理マニュアルの周知を図る。 | 連携においては口頭だけでなく、記述で示しチェックを入れることで伝達漏れのないようにした。感染症予防に早い時期から取り組んだ。 | B | B | 感染性胃腸炎やインフルエンザなどの集団感染予防に徹底して取り組んだ。 | 職員が正しい知識を身に付け感染症対策を徹底する。子どもたちにも自分の健康についての関心を高めることで、健康管理に必要な方法を自主的に身に付けるようにする。 |
| | （5）地域との連携 | ① 園情報の発信<br>② 園(保育)公開<br>③ 小学校との接続・連携<br>④ こ幼保との連携<br>⑤ PTAの活性化<br>⑥ 地域教育協議会との連携<br>⑦ 学校関係者評価の実施 | 原則毎月1回保育参観、学期に1回学級懇談会・個人懇談会を実施し、園教育保育の理解を図る。小学校との交流では事前・事後に会議を持ち、互恵性のある交流を目指す。 | 2号の保護者も参観に参加しやすいように年間行事表を4月に配布した。地域の会議で子どもの姿や園の取組を伝えたり、運動会いや作品展に招いた。小学校の先生は公開保育を参観したり、講演会に参加したりして幼児教育理解につながった。 | B | B | 音楽会を小学校と別日に実施したが、子どもたちは2・6年生の音楽会を鑑賞し感想を伝え合うことができた。子ども同士の交流や教師間の連携等は日常的に行いたい。 | 園行事や日頃の子どもの姿を地域や小学校に発信して、幼児教育理解の推進を図る。 |
| | （6）施設・設備 | ① 保育環境の整備<br>② 施設設備の有効利用<br>③ 施設設備の管理 | 施設設備の総点検を行い、危険箇所の把握と改善を行う。教育施設として物品整備や施設の有効利用に努める。 | 総合遊具とブランコの危険を見抜き改修した。<br>築山の土の補充を行った。 | B | B | 遊具・施設設備の点検を強化し、事故の未然防止に努める。 | 地域や育友会の協力もあって環境整備を行っているが、更に連携を深めていきたい。 |
| | （7）情報管理 | ① 公文書の収受・保管<br>② 公文書の作成<br>③ 個人情報の管理・保護<br>④ 情報の収集 | 情報管理マニュアルに基づき、周知徹底する。 | 情報収集や保管のあり方・出し入れを管理する。情報漏れにつながることを禁止する。 | B | B | データの出し入れの記録簿を作成したり、個人情報の管理はマニュアルを順守した。 | 個人情報やセキュリティーに関する一人一人の意識を再確認し、共通理解を行う。 |